



宮本勝先生をお送りする

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2017-04-20 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 片山, 晴夫 メールアドレス: 所属:
URL	https://hokkyodai.repo.nii.ac.jp/records/10648

宮本 勝先生をお送りする

片山晴夫

宮本勝先生は、本年三月三十一日をもって、北海道教育大学旭川校を定年退職される。先生が、北海道大学文学部助手として職に就かれたのが昭和四十七年十一月であるから、通算二十二年と五か月余を国立大学教官として勤務されたこととなる。先ずもって、このことを慶賀申し上げる。

先生は、昭和六十一年四月、旭川校に助教として赴任され、翌年十月には教授に昇任された。以来十九年余、国語科の文字どおりの大黒柱として職務をこなされてきた。

先生が旭川校へ赴任された当時、国語科は困難な状況にあつたといえよう。相次ぐ教官の移動もあつて、学生たちの中には不安な気持ちを持っていた者もいたであろうことが推測された。そのような状況の中で、先生は、学生たちが落ち着いて勉学に集中できるように様々な配慮をされた。学生たちの教官研究室使用の緩和を始めとして、旭川校国語国文学会会長として学会報の掲載内容の改革にも尽力された。

その後、先生は、カリキュラム委員会と教育実習委員会の委員長としても活躍された。また、平成五年からは旭川校の代議員

として、大学運営機関の要職を務められ、さらに、平成七年四月から十三年三月まで、二期六年間、北海道教育大学教育学部附属旭川小学校校長として、その任を全うされた。

この間、平成八年に発足した北海道教育大学旭川実践教育学会の副会長も務められ、この学会の基盤づくりにも尽瘁され、北海道教育大学語学文学会の会長としても職責を果たされた。

このように顧みると、先生は、旭川校においてのみならず、北海道教育大学の教育研究活動の全体を視野に入れて、懸案の処理と様々な問題の解決に当たられたということが出来る。また、旭川市の井上靖記念館の運営委員会委員長も務められ、地域文化の充実と発展にも寄与されている。

さて、宮本先生の御専門は、『列女伝』研究である。研究業績を拝見すれば、そのことは瞭然たるところである。『列女伝』の歴史的な価値と普遍的なそのの考究が、先生の研究の柱であると思われる。

先生は、早くからこの著作に注目され研究を積み重ねてこられた。先生の先駆的な研究の蓄積があつて、はじめて『列女伝』

は学会で注目されることとなったといっても過言ではあるまい。よって、先生は『列女伝』研究の生みの祖（おや）であるということもできよう。

先生が『列女伝』研究に着手され、その成果を発表され始めた昭和五十年代は、女性学、ジェンダー論等が盛んになり始めた時期と重なっている。社会学の分野から出されたこれらの理論は、現在の学会では冷静に受け止められつつあるが、当時においては、それまでの研究のあり方に対する先鋭的かつ挑戦的な論として広がっていった。「女流文学」などという言葉に異を唱える論も現われ、『男流文学論』という著作も出された時期であった。

先生は、このような当時の学問のあり方に対して、「古典の研究においては、それが流行に流されるようなものであってはならない。そして奇を衒うようなものであってはならない。」と述べられた。また、「古典研究および訓古学では、薄い紙を一枚一枚糊で貼り付けるようにして積み重ねていくことが肝要である。」とも言われた。これらの言に、中国の経学研究に専心されている先生の真摯な姿勢が表れていることを知らされ、感銘を受けた。

また、先生は、平成五年四月、旭川校に発足した大学院教育学研究科修士課程国語教育専修の創設に、全力を注がれた。大学院づくりに向けて先生の執念の現われとも思える多忙な様子は、傍から見ていると心配なほどであった。したがって、平成五年四月

に、国語科教育に池澤稔先生、国文学に伊藤一男先生を迎えて事成った時、先生の胸中はいかばかりであったか。当時の学会報に、「おおきな喜び」と題された先生のエッセイが掲載されている。

さらに、先生は、大学院発足時頃から、学生たちに対する漢字教育にも専心されてきた。学生たちの漢字の読み書き能力が低下していることを憂慮されて、授業科目の中に「漢字漢語概論」〈二単位〉を創設され、学生たちの漢字の読み書き能力の向上に努められた。この五年ほどは、学生たちの古典文法の能力の減退が顕著になってきたことも憂慮されて、授業においては古典教育の充実に務められた。これらの授業の開設等は、国語科の学生たちがこのまま卒業して教育現場に立つことになったら、という先生の思いの現われであったろう。また、これらは先生の教育者としての仕事を語る上では、看過できない貴重な業績といえよう。

今後も、先生は旭川市に在住されると聞いている。今年度四月に、国立大学が法人化され、北海道教育大学の再編が進む中で、先生には、倍旧の御支援をお願い申し上げるとともに、旭川校の今後のあり方を大所高所から見守り、御助言等を賜りたいと思う。